

2023年3月分総評 杉本真維子

「リリカルな電気よ、走れ！／地下鉄の超光速の猛省を見よ」折田日々希（神奈川県）  
抒情と電気。地下鉄と猛省。目くるめく今に追いつこうとするかのような加速した言語のすがたが印象的です。

「また僕が夢で死んだと母さんが／りんごの皮を剥きつつ話す」サトヤマキュー（鹿児島県）  
「母さん」はりんごに包丁をあててその皮をくるくると剥いていたのかもしれませんが。まだなんとかりんごとつながっているりんごの薄い皮の心もとなさ。そのどこかへと繋がる一本道のようなもの。死んだと聞かされた「僕」の死への不安が漂います。

「生乾きの茶葉をすてる。／ポリ袋が身じろぎする。」水木貴奈子（奈良県）  
日常の片隅で、命のないものが口をあけて、かつて命のあったものをのみこんでいます。彼らはおのれの内側に命を呼び寄せようと待っているのかもしれませんが。

「寂しさを排水溝に流して／身体ばかりが綺麗になってく」さくらあかね（埼玉県）  
寂しさを流してもまだ残る寂しさが、寂しさとは何かを問いかけてきます。

「惑星にタロットカード置いてきて／百年後には神ばかりの都市」小林紅石（埼玉県）  
超越論的な都市の光景に魅了されました。像とは別のもう一つのイメージの広がり的事物を詩と呼んでいるのかもしれませんが。

「コンビニは常に明るい敗戦日」長谷川柊香（宮城県）  
コンビニエンスストアの空疎な明るさのなかに、私たちの歴史の深い虚無感が埋め込まれているようです。

「斧を振るねばつく斧を振る」長谷川柊香（宮城県）  
振り上げ、振り下ろし、また振り上げる。動作がもたらす体感をうまく言葉に還元しています。

「照れ隠し、グラスの氷が／鼻の頭にキスする」小沢旭（山梨県）  
氷とはつねに初々しいものです。鼻の頭のひやっとした驚きも然り。それら二つの出会いを祝福したくなります。

「ラムネのむ／神がよすがとなるように」有野水都（東京都）  
ラムネと神という二つのものの離れた価値観がポエジーを生み出しているのでしょう。とはいえ、以後、透明で美しいラムネという飲み物がどこか神聖なものに感じられます。案外、何か関係があるのかもしれませんが。

「君はストーブを消す けものから／音も無く遠ざかる慎重さで」志内悠真（京都府）  
火気と獣。どちらも危険を孕んだものとの対面ですが、多くの人はこの二つの共通点にはなかなか気づかないでしょう。優れた観察眼の持ち主です。

「うしなわれましたと告げる海／一緒にさがそうと膝をついて／どこ」 うたてし（東京都）  
自然の猛威に振り回される人間の困惑、絶望、孤独。間（ま）（この場合は呆気にとられたような困惑の間（ま））は、やはり散文よりもこのような短詩型のほうががちりとつかみず。

「いびつな音を響かせて、／肌をさらう列車／記憶を置き去りにして。」 こはくいろ（京都府）  
列車が通過する瞬間でしょうか。強い風にわっと全身をさらわれたときのことを「肌」にまで落とし込んで受け止めているところがいいと思います。無意識に身体に刻み込まれた記憶はいつか詩に書かれることを待っているのかもしれない。

「じっちゃんのおもかげおくり／からだはんぶんが新聞紙／／あと湯呑み。」 小井詩文（京都府）  
語り手の視界のなかの「じっちゃん」の姿に二人の関係性が滲んでいます。さりげなくいつもそばにいてくれたのかもしれません。

力ある新しい投稿者が続々と現れていますね。次回も楽しみにお待ちしております。